



「すっごく儲かる依頼を見つけたの！」  
 ゼニスがそう言った途端、俺たちはテーブルに突っ伏した。  
 すっごく儲かる依頼が見つかった。  
 まあ確かに、俺たちは冒険者パーティだ。  
 しかも、迷宮探索を主とするS級冒険者。  
 迷宮探索するのは、難易度が高く、相応の冒険者にしかできないが、その分、大きな儲けが期待できる。  
 ただ、その準備には金が掛かる。  
 そりゃ、何の準備もせずに行って、運よく魔力付与品の一つでも見つければ、そりゃ文字通り一攫千金って感じだが、世の中はそううまくできてねえ。迷宮の中で迷ったり、強い魔物に遭遇してつちもさつちもいなくなったり……色々あって野垂れ死ぬのが関の山だろう。  
 そして俺たちは、つい先日、迷宮探索に失敗したばかりだ。  
 といっても、別に誰も死んじやない。ただ、別の奴らに先を越されたっただけだ。  
 迷宮は守護者を倒し、最深部にある魔力結晶を抜き取れば、ゆっくりと崩壊していく。  
 俺たちが探索の途中で崩壊の前兆を察知し、脱出してみると、出口付近で祝杯を上げている連中がいた。つまり、奴らが俺たちより先に守護者を倒し、魔力結晶を手に入れたっわけだ。  
 当然、俺たちの準備や苦労は水の泡。  
 今回は守護者まで行くつもりでいたのもあって、準備にはかなりの金を掛けた。  
 それがまったく回収できず、現在は金に困っている。  
 借金こそないものの、適当な依頼をこなして金を稼いでいる状況ではあるが……。  
 だが、  
 「ガセだなそりゃ」



書き下ろし小説④ 「お前騙されてるんじゃないかねえの？」

理不尽な孫の手



「ねえ皆聞いて、いい情報があるの！」  
 それは、真夏の午後のことだった。  
 王竜王国の夏は、俺たちが思っていた以上の酷暑で、数百年前はこのあたりが砂漠だったという噂に、さもありなんと頷くぐらいで、正直この暑さが過ぎるまでは、何もしたくないというのが本音であつた。  
 とはいえ、我がパーティ『黒狼の牙』の妹分であるゼニスがわざわざ情報を集めてきてくれたのだから、話ぐらいい聞いてやるか。  
 「却下だ。どうせくだらねえ依頼だろ？ このクソ暑いのに何やらせる気だ？」  
 「もう、せめて最後まで聞いてよね！」  
 おっといけねえ、あまりの暑さのせいで本音が漏れてしまった。  
 「もう、パウロつたら、ゼニスをイジメないの」  
 「ほんとにこの男は大人げないのう。話ぐらいい聞いてやらんか」  
 「……ゼニスはいい情報だと言っているぞ」  
 エリナリーゼ、タルハンド、ギレーヌからそれぞれ素朴な感想を頂いた。  
 へいへい、俺が悪うございました。  
 「冗談だよ。で、何だよそのいい情報って」



つづきは、2022年3月16日(水)発売のBlu-ray Chapter 4 初回生産限定版  
でお楽しみください。

言うまでもないことだが、「金に困っている」なんてのは全ての冒険者に共通していることだ。  
俺たちにとってウマイ話ってのは、誰にとってもウマイ話。

ウマイ話には裏がある。

「喜び勇んで行ったところで、俺たちと同じように情報に踊らされた馬鹿共と鉢合わせして、喧嘩しながら目標があるという洞窟に入ってみりゃあ、ただの熊の巣穴だった、なんてパターンならまだいいが、洞窟の奥地が盗賊団のアジトだったりした日にゃ、目も当てらんねえ」

「なんで確かめしないで断言するのよ」

「そりゃ体験談だからだよ。なんとか殲滅して帰ってきたら、情報を買ってた奴らがドヤ顔で『盗賊団討伐依頼』を完了してたりしやがるんだ。ふざけんなって話だろう？」

エリナリーゼもタルハンドも、その時のことを思い出してんだらう。げんなりした顔だ。

ギレーヌだけは、すでに意識が今日の晩飯に向かっていているな。厨房の方からいい匂いがしてきたし。口元によだれが浮かんできている。

「ギースが持ってきた情報ならまだしも、おめー程度が手に入れられる情報を、他の連中が持っていないわけがねーんだよ！ 本当の儲け話ってのは、誰もが隠すから外には出てこねえもんなのさ」

「むっ」

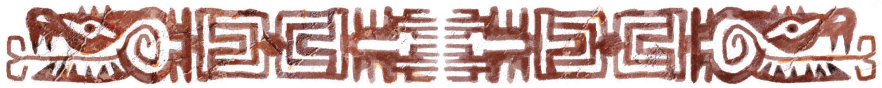
ゼニス頬を膨らませて、エリナリーゼとタルハンドの方を見る。

普段からゼニスを甘やかしてる二人。いつもだったら擁護が入るところだが、今回に限っては二人も苦い顔だ。

「まあ、そういう日もありますわ。これも経験ですわよ」

「落ち込むことはない。情報の真否を見極められるようになるには、相応に時間が掛かる」

「うむ」



ギレーヌがわけ知り顔で頷いているが、この中で一番ガセ情報に騙されるのはこいつだ。多分、騙される確率で言えばゼニスの倍はあるだろうな。ちなみにゼニスの次が俺だ。悔しいけど、エリナリーゼやタルハンドは滅多にガセに引っかかりかねえ。

「そうとも限らねえぜ」

その声に振り返ると、入り口に見知った顔があった。

ギース。この猿顔の盗賊は、我がパーティで最もガセに引っかからない男だ。彼はいつものように余裕でひよこひよこ部屋に入ってきた。

「くー、あっちー」

そして、テーブルの上にあった水差しの水をゴクゴクと飲み干した。

「で、何だよ。そうとも限らねえって」

ギースは汗を拭いっつ、なんてことないようにこう言った。